



横断型科学技術のためのヒトづくり

横断型基幹科学技術研究団体連合副会長 藤田 政之*

第15回横幹連合コンファレンスは、東京工業大学大岡山キャンパスにおいて本年12月14日(土)～15日(日)にわたって開催されます。コンファレンスのテーマは「多分野連携研究と横断型人材育成」です。横断型科学技術においても、人材育成が重要であることは言うまでもありません。コトづくりを推進していく横幹連合にとって、そのための「ヒトづくり」もますます大切になってきています。

創立以来20年が経過し、横幹連合は次の20年を見据えるときに来ています。人材育成についても、時間の経過に応じて次の世代を担う人材を育てていこうとすることも真剣に考えていく時がやってきていると言えます。そのためにはこれまでの20年の活動を振り返るとともに、世代の交代が順調に進んでいくような仕組みづくりも必要です。

人材育成について振り返ってみると、これまでの20年の間にも活発な議論が行われてきています。例えば会誌「横幹」3巻1号(2009年)では「横断型人材育成」のミニ特集が組まれています。そこでは横断型人材の必要性、文理横断との関係、企業や大学院における現状と課題などが述べられており、その推進に向けた方策についてまとめられています。これらは横断型人材育成推進調査研究会によって得られた提言となっています。

さらに会誌「横幹」8巻2号(2014年)でも「人材育成」が再び取り上げられています。こちらでは新しい大学院における横断型人材の育成について議論されており、北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)知識科学研究科や、公立はこだて未来大学、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント(SDM)研究科、産業技術大学院大学(AIIT)など

における体系化された教育プログラムが紹介されています。また横断型人材育成プログラム調査研究会の成果は、知の統合シリーズ「価値創出をになう人材の育成」の出版につながっています。

次世代を担う若い人材を育てようとするとき、その出発点はこの大学院での研究室にあるように思います。学生は教室という場での教員の授業に感動を覚えたり、知的な好奇心を駆り立てられて学問を志すことが多いのではないのでしょうか。そして卒業研究、修士研究さらには博士研究へと進むとき、指導教員を決め研究室に配属されるという形が取られます。このとき指導教員と研究室という場が若い人材を育てる貴重な現場ということができます。

研究室で指導教員と対話しながら、解決しなければならない課題を見抜き、解決のためにはどのような方法や手順で進めるべきか、綿密なサーベイで的確に課題を把握し練り上げていきます。合理的な解決へと手順を踏んでいくわけですが、必ずしも思った通りには進まないものであることや、考えもしなかった方向に新たな転機を見出すことも経験します。このような研究活動を通じた教育の過程の全体が「ヒトづくり」にとって重要です。

そのうえで横断型人材として伸びていくためにはどのようにしたらよいのでしょうか。文理を問わず学問分野を横断し社会や人間とつながっていくためには、やはり研究室という環境を開放的で自在にし、流動性を高め多様な体験を積み重ねていくよう仕向けてあげることが望まれます。異なる経験知を重層的に高めていく「遍歴の勧め」が大事です。海外留学の勧めなども欠かせません。横断型人材はきっと多くの「出会い」の中から生まれてくるはずです。

*金沢工業大学教授